



▲ベートーベンの時代のハイリゲンシュタットの風景

について自分達で調べた後聞いた「交響曲第五番」とでは、同じ曲でありながら、全く違つような気がしました。特に、「ハイリゲンシュタットの遺書」を中心としたヒデオは、ベートーベンの本音を伝えてくれるように、『偉大な作曲家、耳が聞こえなくても作曲を続けた作曲家』といった、うわべだけの見方をしていたことが恥ずかしく思われました。この曲の学習の締めくくりにして視聴した「交響曲第九番」の「歓喜の歌」では、指揮をしているベートーベンを想像しながら僕は胸がいっぱいになりました。ベートーベンにとって音楽は、生きていく力だったと思います。僕にとっての音楽は、生活の一部であり、生きていく楽しみ、時には僕を勇気づけてくれるものです。音楽について、ベートーベンについて真剣に考えたこの学習、とても意義あるものとなりました。

域には、「川尻鯨唄」がありません。僕も小学生のころからずっと、この鯨唄を歌ってきました。大人になっても歌い続けて、今度は地域の小さい子どもに「川尻鯨唄」を教えあげようと思っています。それも、日本の音楽の楽しみ方だと思つてから……。

テレビの大画面に映し出された白い宮殿。鮮やかな衣装に身を包み、踊るフラメンコ。スペイン！ 中三になって鑑賞した「アランプエス協奏曲」は、とても好きな曲の一つとなりました。八分の六拍子に四分の三拍子がまざつたリズムもおもしろいし、ポピュラーな楽器としてしか見ていなかったギター、芸術性の高さ、表現の豊かさ。そして何といても、一楽章で出てくるチェロのソロは魅力的でした。チェロという楽器は、あたたかみのある、おらかな音というイメージをもっていました。このチェロのソロは、情熱的で悩ましい感じがします。

第一楽章を聴く時の一番の楽しみは、このチェロのソロとなりました。

先生、こうして三年間をふり返ってみると僕はつくづく思つたのです。

「音楽は、迷路だ。」

と……。この迷路は楽しい迷路です。謎を解き明かしながら進んでいき、「ゴールは僕は僕なりに、

他の人は他の人なりにみつければよいのだから……。一つ謎を解くごとに、音楽を聴く楽しさは大きくふくらんでいくのです。

先生は、その謎解きの方法、つまり音楽のレベルの高い楽しみ方を僕達に教えて下さったのですね。一つの曲でも、LD、CD、ビデオと、いろいろなものを通して見て聴くことや実際に実物の楽器を演奏することや、自分で調へることなどによって、僕達は、音楽との出会いが楽しいものとなったように思います。

先生、こうして僕も少しずつですが、音楽を聴く楽しさが分かってきました。これは僕にとって中学校生活の貴重な宝物となることでしょう。中学校生活の残り数ヶ月間、まだまだ謎解きの楽しみはありそうです。音楽のおもしろさ、音楽を聴く楽しさを、僕はこれからも追求していこうと思っています。ところで僕は今、ドヴォルザークの交響曲第九番「新世界より」を繰り返し聴いています。スメタナの「モルタウ」に似ているところがあつて気に入っています。

中でも好きなのは、第三楽章のスケルツォです。先生はどこですか。今度先生の意見も聞かして下さい。

それでは、次の鑑賞の授業を楽しみにしています。

中三 夏 松永 尚樹